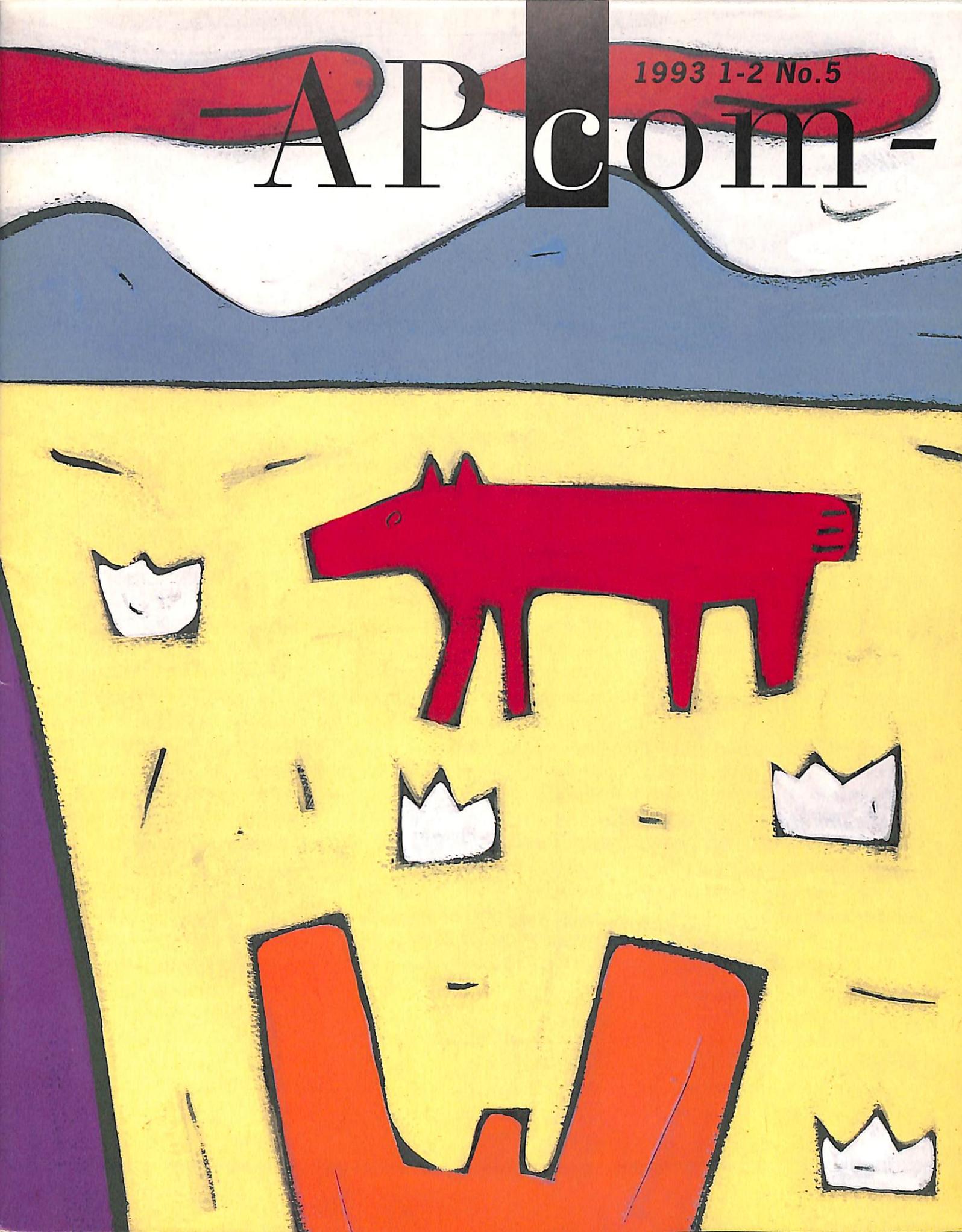
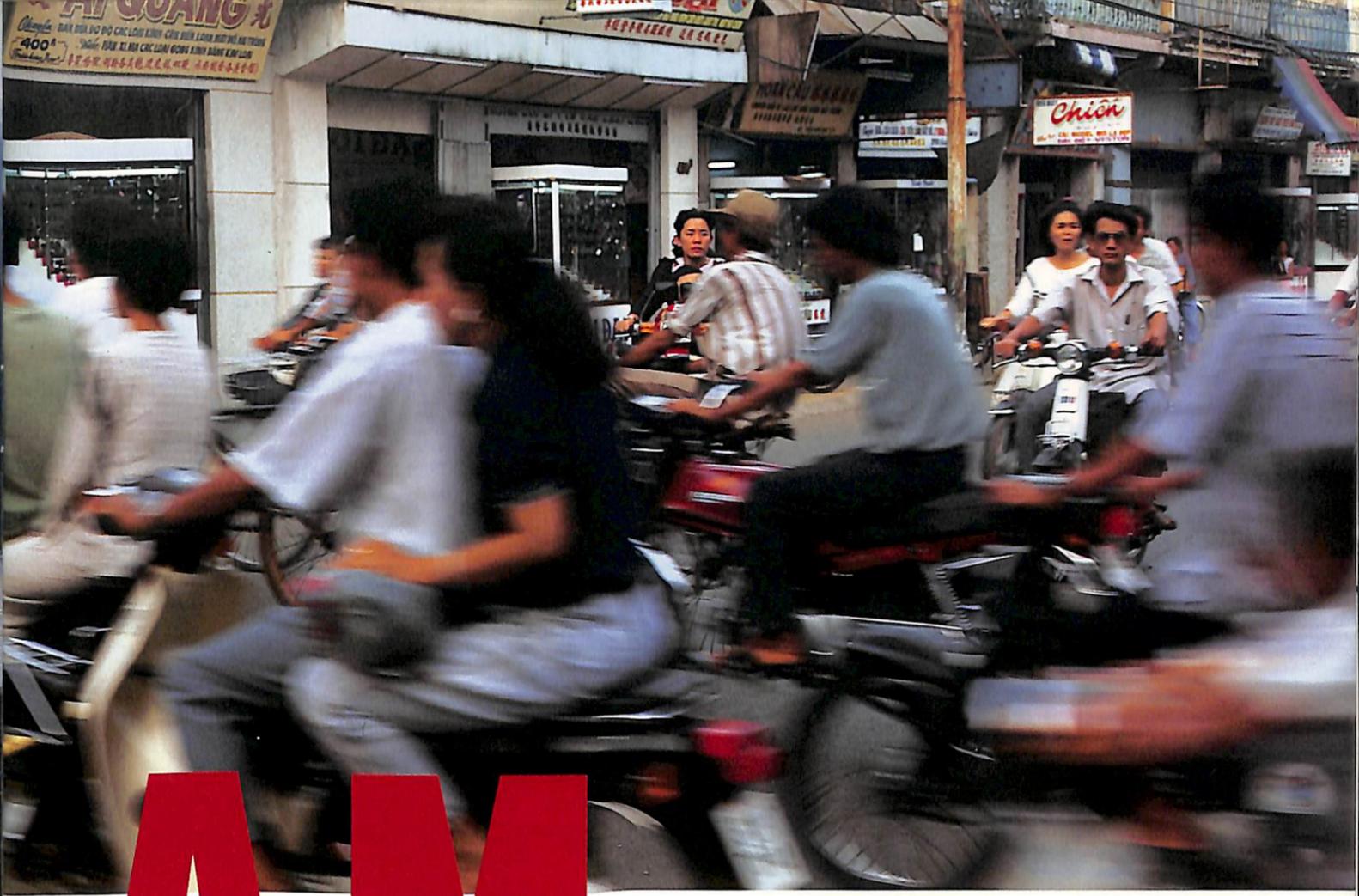
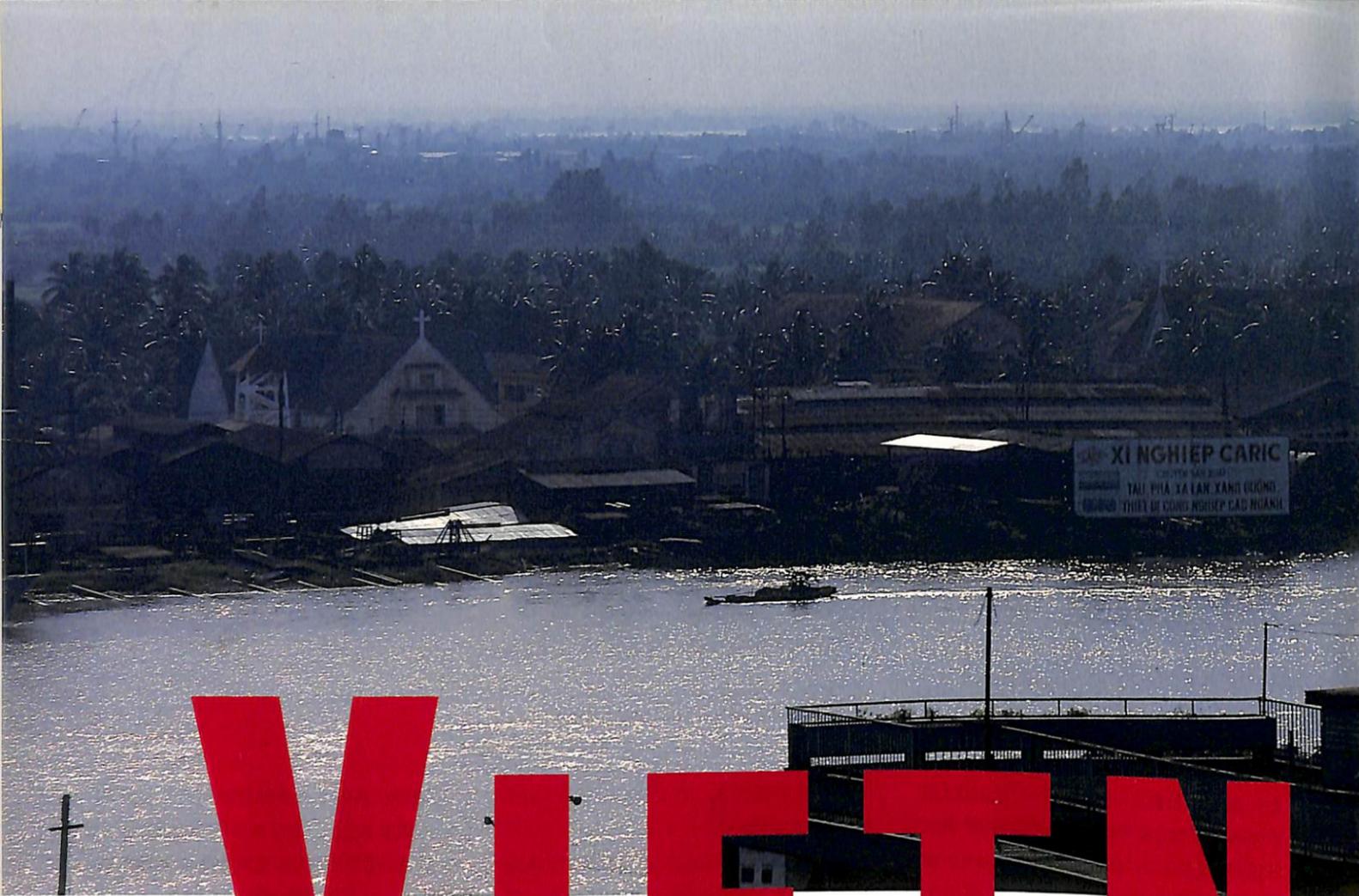


1993 1-2 No.5

AP COM-





VIETNAM

AM

ベトナム コロニアルの残像

世界中を震撼させたあのベトナム戦争が終わって、すでに17年がたつ。
 はなばなしくジャーナリズムで報道され続けたベトナムも、1975年の解放後は、再び謎のベールに包まれてしまった。
 マルグリット・デュラスが『愛人』のなかで、またグレアム・グリーンが『おとなしいアメリカ人』のなかで描いた、
 フランス領インドシナのエキゾチックな南国風景。
 フランス人が建設した東洋の美しいまち並みは、いまま変わらずに残っているのだろうか。
 ドイモイ(刷新)政策で海外へ門戸を開き、ようやく素顔を見せはじめたベトナム。
 フランス植民地時代の建築を求めて、われわれはホーチミン市(旧サイゴン)~フエ~ハノイへと北上した。

写真：普後均 文：編集部



- ホーチミン市
- 1 サイゴン大聖堂
 - 2 郵便局
 - 3 旧市庁舎 (現・人民委員会)
 - 4 国立劇場
 - 5 病院
 - 6 旧コーチナ総督宮殿 (現・戦争博物館)
 - 7 旧裁判所
 - 8 旧労働局
 - 9 旧関税局
 - 10 旧インドシナ総督宮殿 (現・統一会堂)
 - 11 クーロンホテル
 - 12 フローティングホテル
 - 13 ホーチミン市歴史博物館
 - 14 ホーおじさん記念館



上：パッタの大群のように押し寄せるオートバイ。ホンダ、カワサキが若者の人気
 前頁：クーロンホテルから眺めたサイゴン川。ベトナム戦争当時は、この対岸から解放軍が攻撃をしかけてきた



Chaotic Asia

熱帯のなかの西欧

ベトナム社会主義共和国。社会主義という言葉がかもしだす統制的、秩序的なイメージは、熱帯のホーチミン市に降り立ったときにはじけとんだ。鼓膜をつき破るような喧騒、メコン河の流れのように果てしない群衆、雑踏…。

アジアの混沌(カオス)が熱帯の都市をいっそう熱く焦がしている。

まるでそれに対抗するかのように建つヨーロッパスタイルの建築群と緑の並木。植民地時代そのままに、当時の建物がそっくり姿をとどめていた。



上：フレンチ・ゴシック様式のサイゴン大聖堂。ふたつの尖塔はあとから付け加えられた。設計はジュール・ブラルド。1880年
下：サイゴン市庁舎のファサードを飾る彫刻
前頁：フェルナンド・ガルデが設計したフランス・アン・ピール様式のサイゴン市庁舎。現在は人民委員会の建物になっている。1908年

まちは、鍋の中身をぶちまけたようにごったがえしていた。すさまじい騒音をまき散らして、バッタの大群のように押し寄せるオートバイ。クルマはのべつまくなしクラクションを鳴らし続け、そのあいまを縫って自転車とシクロ(輪タク)が走り抜ける。群がる物売り、シクロの客引き。地べたにしゃがみこんで屋台のモツ入りベトナムうどんやぶっかけごはんをかきこむ人々。鼻先をオートバイがかすめてもおかまいなしだ。ここでは、天地がひっくりかえっても、誰も驚きはしないだろう。はてしない喧騒と雑踏……。アジア的な混沌の波にもまれて市の中心部にたどりついたとき、最初に目に飛び込んできたのは、美しい緑の並木道にそそり建つサイゴン大聖堂と人民委員会の建物だ。南国の強い日差しを受けて建つ植民地時代のヨーロッパ建築。混沌に対抗するかのように建つ建築物は、熱帯の炎天下で奇妙なコントラストを見せている。まちの風景にとけこむでもなく、かといって調

和するでもない。オートバイやベトナムうどんと同じように、まちのなかに、ただ混在しているのだ。

炎暑のなかで撮影がはじまった。植民地時代の建築を探す手がかりはたったひとつ。1899年から1902年までの間、インドシナ総督としてこの地に赴任したポール・ドゥーマーが著した回想録『L'Indo-Chine française』の中に、当時のサイゴンとハノイの地図、何枚かの建物のスケッチが残されている。100年前のこの地図を頼りに辿っていくと、メインストリートも主要な建物も、ほとんど変わらず当時のままに残っている。ベトナム戦争ですべて破壊されたのではないかという心配は無用だった。教会、市庁舎、裁判所、病院、郵便局、関税局、劇場……。ほとんどが公共建築物だが、通りを一步奥に入ると、こぢんまりした邸宅や商館が緑の木立の向こうにみえ隠れている。



フランスの植民地建築

1858年から始まったフランスの植民地支配。以降、フランス人建築家の手によって、多くの建築物がつくられていった。しかし初期の段階では、都市づくりや建築に関して、計画的なプランがあったわけではない。本国フランスでの流行の模倣、ぎょうぎょうしい古典主義、バロック風装飾過剰…総督や建築家の好みによって、あるいは本国の指令や予算によって、さまざまな様式が同居する結果となった。

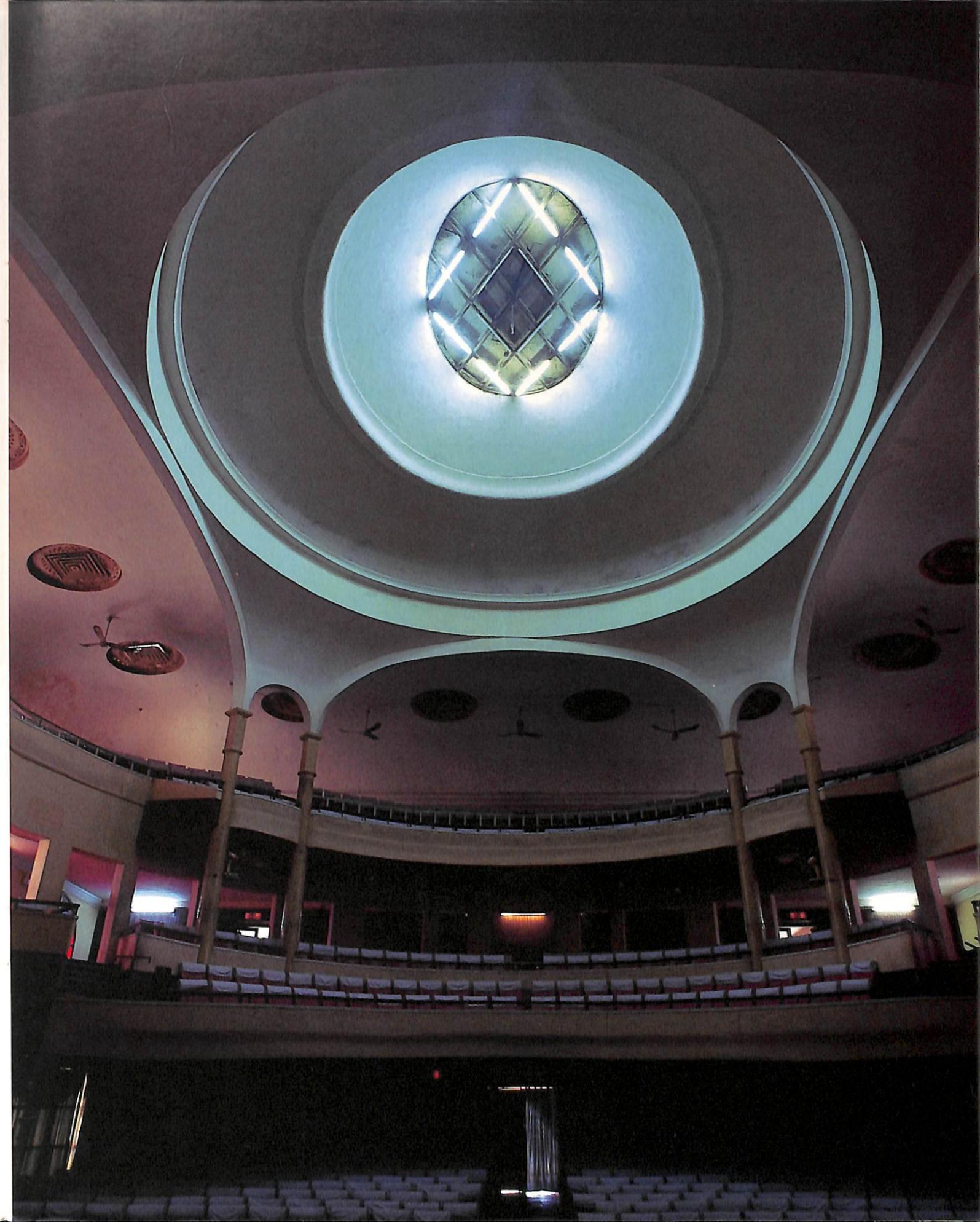
French Colonial Style

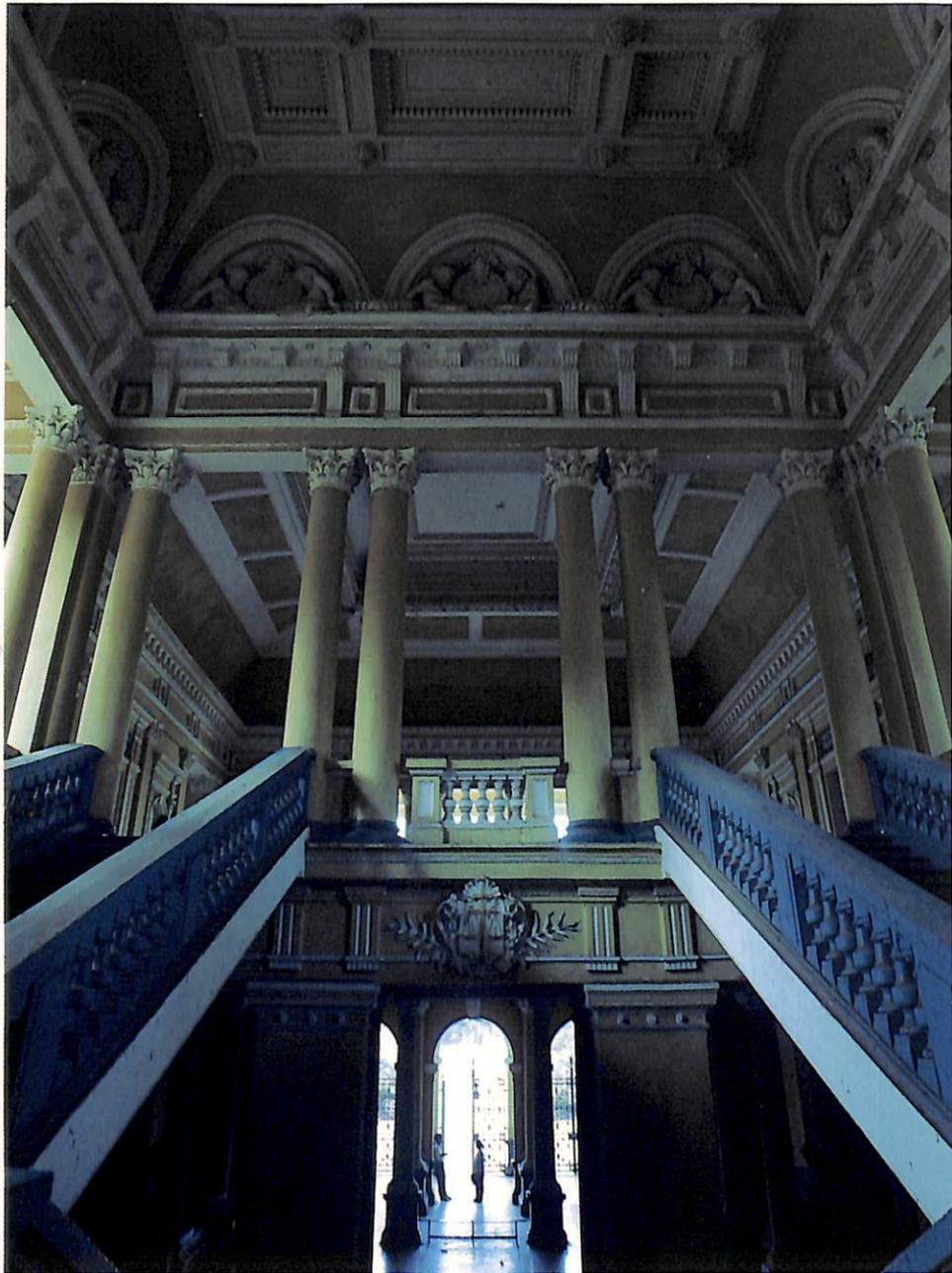


さまざまな建築様式の同居、それは植民地時代の初期に建設ラッシュが続いたホーチミン市の建物に顕著にあらわれている。たとえば、植民地政府建築局のディレクターであったアルフレッド・ファローが設計した裁判所とコーチシナ総督の宮殿。ギリシア神殿風の円柱を並べたこのふたつの建物は、フランス古典主義の代表作ともいえるルーブル宮殿の模倣。ファサードに女神や動物の彫刻を過剰なまでに装飾したフランス・アンピール様式の市庁舎も、パリの市庁舎にそっくり。赤煉瓦のサイゴン大聖堂は典型的なフレンチ・ゴシック、といった具合だ。そもそも北フランスで生まれたフレンチ・ゴシック様式が、高温多湿なベトナムに適しているとはとても思えない。郵便局にいたっては、開口部は正面の出入り口だけ、おまけに天井はガラス張りだ。本国の権威を印象づけるのが第一で、ベトナムの風土・気候への配慮は二の次であった。唯一の例外は、植民地建設後すぐに建てられた軍病院だろう。広々とした開放廊下、十字のバターの通風孔をあけた日差しよけなど、組立式バラックとはいうものの、ここの風土にあった設計がなされている。こうした統一性の欠けた植民地建築に大きな転機をもたらしたのが、フランスの都市計画

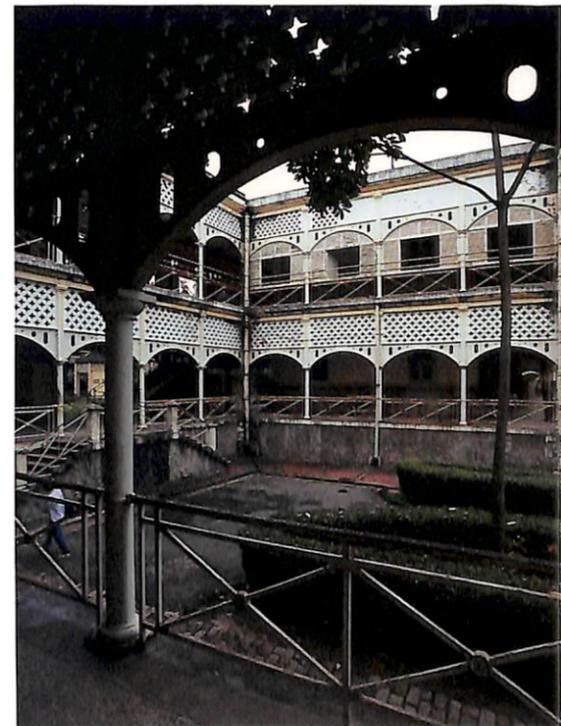
家エルンスト・エブラルドである。1921年にベトナムにやってきたエブラルドは、フランス本国の権威主義的な建築をおしつけるのではなく、またインドシナ地方の装飾を安易に建物にはりつけるのでもなく、あくまでもベトナムの風土にあった建築・都市づくりをするべきだと主張した。アンコールワットや仏教建築、地方の集落などを調査した彼は、主にハノイを中心にその計画を実行していく。直射日光やスコールをさけるための突き出た庇、アーケードなどもエブラルドの考案だ。ハノイのまちがホーチミン市よりもずっと洗練されて見えるのは、気候が穏やかで湖が多いということもあるが、彼の功績とするところが夫だろう。「土着性を重視し、環境・風景と一体化する建築」を目指したエブラルドが、みずから設計した建物がいくつか残っている。そのひとつ、極東フランス学院(現在、ハノイ歴史博物館)は、仏教寺院と西洋建築をミックスしたかのような不思議な雰囲気漂わせている。シノワズリ(中国趣味)とも一風変わった、インドシノワズリ(?)ともいべきスタイルだ。この奇妙な混合様式はフランスに逆輸入され、パリ大学のインドシナ学生寮などに模倣されて、はるかな極東に建設された植民地へのエキゾティシズムを駆り立てたのであった。

上左：サイゴンの郵便局。反対正面にホーチミンの肖像画が飾られている
上右：郵便局の外観
下：国立劇場の外観
次頁：ヨセフ・ヴィクトール・ギチャード設計の国立劇場。サイゴン。1895年





French Colonial Style



上：極東フランス学院（現在はハノイ歴史博物館）。環境・風景と一体化する建築を主張したエルンスト・エブラウドが設計。奇妙なオリエンタリズムをかもしだしている。1926～31年
 中：ハノイ市の中心部、ホアンキエム湖の周辺には、植民地時代の建物がたくさん残っている
 下：現在ベトナムに残っている植民地時代の建築は、その大半が補修もされぬままになっている。これはファサードだけを残しているが、新しい建物の一部になるのか、あるいは取り壊されてしまうのか。ハノイ
 右：1865年に建てられた軍病院で、現在も病院として使われている。ベトナムの気候風土にあわせて通風・遮光なども考慮された美しい建物だが、設計者はわかっていない。サイゴン
 前頁：サイゴンの旧裁判所。ルーブル宮殿を模倣して円柱が並べられた。アルフレッド・ファロー設計。1885年



カイティン帝の陵墓

Cultural Crossroad

東洋と西洋の交錯

インドシナ土着の文化をフランス的感性で融合させたのがエブラルドの建築だとすれば、その逆に、フランス文化を伝統的な王朝の建築に取り入れたのが、古都フエに残るカイティン帝の陵墓である。ヴェルサイユ宮殿への憧れと夢、フランス支配下の皇帝の、交錯した思いがここに眠っている。



上：カイティン帝陵の外壁をおおう装飾。柱にからみつく龍と、西洋的なパターンが奇妙にとけあっている
下：中国への憧れもまたベトナムには根強くあった。阮朝王宮の太和殿。円柱を皇帝の象徴・龍が取り巻いている
次頁：カイティン帝陵の鏡の間。この鏡はナポレオン3世から贈られたものだというが、真偽のほどはわからない

ホーチミン市とハノイのほぼ中間、ベトナム戦争の激戦地となった北緯17度線近くに、古都フエはある。ここはベトナム最後の王朝、阮朝の都があったところ。ゆったりと蛇行するフォン河が市内を流れ、寺院や歴代の皇帝廟(陵墓)が点在する、落ち着いたたたずまいを見せる都市である。

カイティン帝の陵墓は郊外の小高い丘の斜面に建っている。急な石段を上って行って、えもいわれぬ東西融合の建築を目にしたときには、ただ茫然とするしかなかった。バロック的な装飾におおわれた白亜の壁面、モダンな黄色の扉、中国風の屋根、という意表をついた取り合わせ。巨大な門柱には皇帝のシンボルである龍がからみつき、四角の付柱上部には中国とヨーロッパの装飾文様が違和感なく同居している。いったい誰がこんな奇抜なスタイルを想像しうるだろうか。

カイティン皇帝が即位したとき、植民地支配はすでに半世紀を過ぎていた。おそらく皇帝は幼い頃からフランス文化に接して育ったに

違いない。息子をパリに留学させるほどに傾倒していたフランス、そしてヴェルサイユ宮殿への強い憧れと夢。生存中に陵墓の建設を開始したカイティン帝の胸中によぎったのは、死とともに見果てぬ夢を永遠に封印しようという思いではなかったか。その思いの強さが、想像を超える建築物を生み出したのだ。ここフエにはもうひとつ、滅びてしまった夢の残痕がある。1833年に完成した約2km四方に広がる阮朝の王宮だ。規模こそちがえ、中国北京の紫禁城そっくりそのままにつくられたこの王宮は、当時アジアで絶対的な権力を誇っていた中国に対する、畏敬と憧憬から生まれたもうひとつの夢のかたちであった。過去に1000年以上も中国の支配下にあったベトナムには、中国建築の影響が根強く残っている。そしてチャンパ王国があったころのヒンズー文化の名残も。さらにフランス文化の混入。変形され、入り混じり、また変形され……融合された血は幾層にも交錯してベトナムの中に流れている。



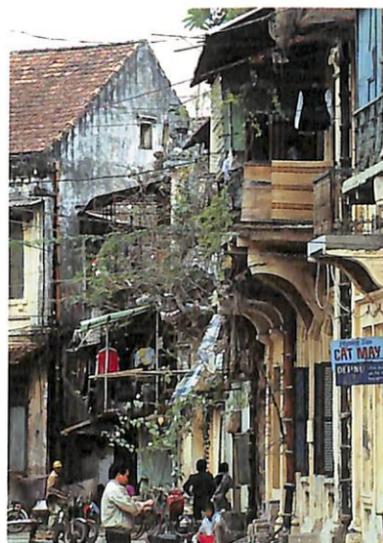


Vital Downtown

飽満の種子

普通の商店街の建築にも、フランス風、中国風、さまざまな要素が入り混じっている。しかし、われわれの目を強くひきつけるのは、建物の様式の微妙な違いではなく、コロニアルの残像さえいつのまにか侵蝕して暮らす、人々の圧倒的な生命力だ。

上：1階が店舗、2階以上が住宅というショップハウスがベトナムには多くみられる。これは上に「新華旅店」という看板があるので中国人が住んでいたのだろう。しかしベランダの手摺りなどにはフランス的な要素もまぎれこんでいる。ホーチミン市
下：バルコニーも生活の場



市街の建物の大半は、おおむね3階建てのショップハウス(1階が店舗で、2階以上が住宅の建物)で占められている。中国風・フランス風スタイルが入り乱れているが、人々はおかまいなしに生活空間を増殖させて暮らしている。瀟洒なバルコニーから突き出た無粋なトタン板の小屋、洗濯物は中国風からフランス風へと越境して万国旗のように延び、薄暗い階段は昼寝をむさぼる人々で10段ベッドにまで早変わりする。どんな建築物であろうが、じわじわと侵蝕し、自分のものにしてしまうエネルギー。すべてのものをねじ伏せてしまう圧倒的な生命力……。

動物になれない人間はここでは生きてはいけない。狂おしいほどの炎暑。地の底から湧いてくるような不気味な生命力。混沌の理不尽さ。理性はなんの役にも立たない。1950年代、インドシナ戦争の特派員としてここにやってきたイギリス人作家グレアム・グリーンは、阿片窟を徘徊してその快楽をむさぼった。阿片をワインのようにこよなく愛したといったほうがいいかもしれない。注意深く練りあげた褐色の阿片を「飽満の種子」と名付けたグリーン。飽満——飽きるまで食べて満腹になること。飽満の悦楽こそが、混沌への入り口でもあり、同時に防波堤でもあることを彼は鋭い洞察力で感知して、そう命名したのだ。マグルリット・デュラスが中国人の愛人との、死ぬほどの欲情と悦楽のなかに身を投げ出したのも、18歳の彼女が理不尽な生を察知したからにちがいない。秩序を求めた母親のように、憎悪と狂気で引き裂かれたく

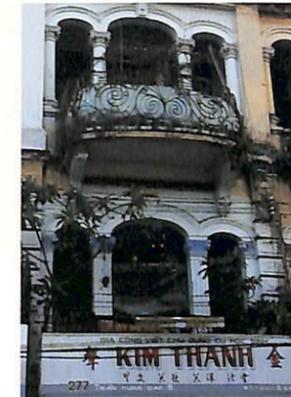
なかったのだ。

グレアム・グリーンは、西欧的尺度、近代的論理で推しはかれないこうしたベトナムの生活原理を『おとなしいアメリカ人』のなかでみごとに描き出している。デモクラシイを掲げる若いアメリカ知識人に向かって、彼=主人公はこう言うのだ。

「きみなんぞ一生かかったって、この強靱さには及ばないぜ。いくら引掻いても傷のつかない塗料があるのを知ってるかい?……この女はおれたち1ダース集めたよりも長生きするよ。……おれたちのように、思想では苦しまない、執念では悩まされない——引掻き傷は出来なくて、ただ古びるだけさ」

ベトナムの歴史はそのほとんどが被征服の歴史であったとって言い過ぎではないだろう。そのときどきの征服者が残していった建築、都市、文化……。ベトナムには固有のアイデンティティがないかのように見えるが、しかしこの国では、アイデンティティとは何か、という問いは意味をなさないのだ。引掻いても傷のつかない強靱さ。メコンデルタの霧からたちのぼるおびただしい生命力、飽満の種子こそがベトナムそのものなのだから。

参考文献:Gwendolyn Wright *The Politics of Design in French Colonial Urbanism* The University of Chicago Press 1991
Paul Doumer *L'Indo-Chine française* Paris
『NHK美の回廊をゆく 東南アジア至宝の旅3』NHK取材班ほか 日本放送出版協会 1991



四点共：突き出たベランダやバルコニーもよく見るとそれぞれ微妙に異なっている

AP com-の内容に関して編集室までご意見をお寄せください。抽選で10名様にベトナムのお土産(ベトナム紅茶5名様、銀のアクセサリ5名様)をプレゼントいたします。

紫禁城マニア

フエの町に初めてたどり着いた日、ほくは少し興奮気味であった。

フエに行くためには、旧サイゴン、現在のホーチミン市から飛行機でダナンに行き、そこから旅行社出迎えの車に乗るのである。正直言って、北京に長いこと憧れて、その文化にどっぷりと浸かってしまったほくには、それとはまったく異質なヒンドゥー建築文明を受容できる柔軟なところに欠けている。

たとえば、ベトナムの建築は、西洋建築史と日本建築史のはざまに位置して、既往の建築史の教科書では、ほとんど顔を出すことがない。まして、カンボジアのアンコール・ワットやインドネシアのボロブドゥールなど、血湧き肉踊り、冒険心を満足させてくれるような遺跡も存在していない。「インド・シナ」半島という呼称から見てもわかるように、インドと中国のたし算としてしか理解されていない。

フエは、そのたし算の一方のインドから中国へと変わる地点にある。それより北は、建築においても中国の文明圏に属しているのである。ヒンドゥーの彫刻の多く残るダナンから旅立ち、中国の影響を多大に受けた阮王朝の首都であったフエに到着した時、興奮気味であったのは、自らが憧れ、既成の知識で理解できる中国文明の一枝に出会ったという、傲慢ともいふべき感情が沸き上がってきたからであった。

フエには、中国北京と同様、方形の城壁があり、その周囲には壕が巡らされている。祖先を祀る大廟、都市神のための建物——城隍廟、官衙建築、そして、南北に並ぶ宮殿群、都市構造は、まったくの翻案である。宮殿は北京に倣って「紫禁城」と命名され、これまた北京と同様、「太和殿」と名付けられた玉座空

間には、「大清皇帝」ならぬ、「大南皇帝」が案座したのである。龍を巻きつけた柱、玉座上の天蓋装飾といった物理的なものから、皇帝儀式の次第の、眼に見えない儀礼にいたるまで、北京を限りなく模倣していた。

宮殿の背後に配された皇帝たちの私的空間には、池が掘られ、園林が造られた。亭が置かれ、あちこちある風景に風雅な漢字によって名称が付けられた。室内には、盆栽が置かれ、椅子・机が配置される。中国風絵画、書が飾られているのである。

フエの紫禁城を外に出ると、天を祭る壇がある。仏寺、塔、皇帝陵墓から、都市を制御する術、風水まで、ここには、ワンセットとして、中国で生まれた空間の技法が輸入されている。それを総称して、ほくは「紫禁城マニア」と呼んでいる。ほくの興奮もわからないではないであろう。ただ、ベトナムのフエに見られたこの「中華への思慕」は、決して、ここのみ特殊に存在していたわけではない。

近くで言えば、尚氏琉球王朝、そして、李氏朝鮮王朝、いずれも北京に倣って、空間を、建物を造りだした。琉球の首里城、ソウルの景福宮に行ってみれば、その強烈な思慕を感じ取ることができる。近世の東アジアにとって、絶対唯一の「文明」とは、明・清のことであり、建築も都市も、中国の建築文明を離れては存在しえなかったのである。いわば、西洋の近世が、イタリアで再発見されたローマ、ギリシアの建築美を規範とし、手を加えていった事象と一対をなしている。

ヴェルサイユ宮殿の東伝

この東アジアの建築・空間規範は、だが、近代になって、西洋の蹂躪をよぎなくされた。ベトナムの本家、清は、1840年のアヘン戦争で敗北を喫し、香港の割譲、上海をはじめとする5港の開港を迫られた。ベトナムへの魔

の手は、1862年、フランスが強要した第1次サンゴン条約に始まる。ついで、1884年、王位継承問題に端を発した朝廷内の混乱に乗じて、フランスは宗主国清を破り、ベトナムを分割統治下に置いたのであった。

清からフランスへ、この支配の転換は、空間や建築にまで波及した。これまで唯一の文明であった「紫禁城」は崩れさり、代わって、フランスの建築文化が入ってきたのである。フエの都城をくまなく歩いてみるならば、この地に浸食してきたフランス建築の影響をそこここに見いだすことができる。

だが、なんとといっても、カイティン帝陵の凄まじさを凌ぐものはない。阮王朝第12代カイティン帝の陵墓として1931年に完成したこの空間は、すみずみにまで、フランスがしみ込んでいた。

全体の構成は、阮王朝の伝統的陵墓制度、すなわち、中国建築文化圏のそれののっとなっている。文官、武官、馬、象の石像による隊列、石段に這う龍、門としての牌楼、福を呼び込む吉祥紋様や文字、屋根上の龍紋、玉座の上にかかる天蓋等は、たとえば、北京郊外にある明13陵、清東陵に端を発している。

だが一方で、柱、アーチ、巨大な鏡、シャンデリアなど、西洋起源の建築細部が、中国建築文化以上にここには繁茂している。西洋列強は、艦隊に乗せて、パリのヴェルサイユ宮殿の様式や空間形式を、非西洋社会に運んだのだ。近くは、ロシア、そして、トルコへと東進が開始された。タイ、バンコクでいったなら、チャクリー宮殿、中国北京の門明園、最後尾は、1909年に完成した日本東京の赤坂離宮であった。

であったから、このベトナム、フエにフランスの建築文化が押し寄せぬはずはない。ただ、以上、ロシア、トルコ、タイ、日本とフエとの相違は、前者がヴェルサイユ宮殿のミ

ニチュアであったとしても、宮殿として造りだすことができたのに対して、後者はそれほどの財力と政治的独立を確保できず、カイティン帝陵を生み出すにとどまざるをえなかったことにある。

「合体」する建築文化

中国建築文明の模倣、フランス建築のキチュ化。こんな風に言うと、ベトナム、フエの建築に、哀愁のみが漂ってしまう。写真で見ても、中国文明とインド文明の辺境に位置し、西洋の帝国主義に蹂躪されたその姿に、われわれは悲しみを感じてしまう。

だが、実際にそのカイティン帝陵を眼の前にして見たならば、哀愁も悲しみも一瞬にして吹き飛ぶ。その異様さは、「折衷」というような上品なことばや「キチュ」といったひとを小馬鹿にした表現で、言いあらわすことはできない。有機的な、遺伝子レベルでの「合体」とでも形容できようか。

韓国、琉球、そして、日本でさえも、建築は、すべて「輸入→合体→自己化」の過程をたどっている。建築文明発祥の中国も、けっして、単線的に発展してきたわけではない。外来文明に影響され、浸食され、奪取されることの連続であった。ベトナム、フエには、それがきわめて、純粋で、典型的な形で出現しているにすぎない。

フエに初めて足を踏み入れた時、中華主義者のほくは、北京の遥か南の地で、中国とみまがうばかりの「紫禁城」を発見し、興奮した。だが、カイティン帝陵の「合体」劇に出くわしたなら、ほくばかりではなく、文明の衝突の凄まじさを感じ、それを自らの文化の機軸に据えたベトナムの貧欲さに感動せずにはおれないであろう。これこそ、ベトナム建築のアイデンティティといえようか。

(むらまつしん／東京大学助手・中国建築史)

● **ホーチミン市歴史博物館 (ホーチミン市)**
Viện Bảo Tàng

ホーチミン市の北端、動・植物園のある大きな公園の一角にあるミュージアムで、歴史博物館という名のおり、先史時代からのベトナム4000年の歴史を概観することができる。石器時代や青銅器時代の遺物、仏像や陶磁器、少数民族の資料などが展示されているが、ここで見逃せないのは、オケオ遺跡からの発掘品。フランス植民地時代



ホーチミン市歴史博物館

に扶南(2世紀頃に現在の南ベトナムからカンボジアの地域に誕生した国家)の貿易都市オケオの発掘をしたフランス人考古学者ルイ・マルレーの、貴重な収集品が展示されているからだ。このなかにはインド経由で地中海周辺からもたらされた交易品もあって、はるか昔から海のシルクロードを介してベトナムとインド、地中海世界との交流があったことが裏づけられた。

開館時間：月～金曜日8:00～11:30
13:00～16:00
土・日曜日8:00～15:30
料金：公園入場料5000ドン(60円)
博物館入場料5000ドン(60円)
※1000ドン=12円で計算

● **チャム美術館 (ダナン)**
Bảo Tàng Điêu Khắc Chăm Đà Nẵng

ダナン近辺は、2世紀から15世紀にかけて、チャム族のチャンパ王国が栄えていたとこ



チャム美術館

ろ。そのチャム族の石像彫刻を一堂に集めたのが、この美術館だ。一見してインドの影響が色濃いことがわかるが、長い歴史のなかではインドだけではなく、さまざまな文化との接触があったことが見てとれる。ここでは、7世紀後半から15世紀はじめまでの彫刻が、様式ごとに4つの部屋に展示されている。南インド芸術の影響を受けた7～8世紀、仏教的特徴がみられる9世紀、カンボジアのクメール文化やインドネシア文化が流入してチャム芸術が最高潮に達した10世紀、徐々にクメール文化の影響が強くなる12～14世紀、といった具合に、複雑



二点共：吹きさらしの建物にチャム彫刻が展示されている

に交錯しているベトナム文化の背景を垣間見ることができる。

開館時間：8:00～11:30、13:00～16:30
無休
料金：12000ドン(144円)
カメラ1台につき5000ドン(60円)

● **フエ博物館 (フエ)**
Bảo Tàng Huế

王宮の周囲を取り囲む堀の外側、フラッグタワーを背にして右側にフエ博物館がある。ここに展示されているのは阮王朝時代



フエ博物館

の宮廷で使用された調度品の数々。ランラという石の打楽器、書齋で使用した机、見事な螺鈿を施した家具、照明器具、皇帝の衣装、装飾品などが、薄暗い館内に無造作に置かれている。とくに第12代皇帝のカイディン帝が使用したベッド、テーブルセットなどが興味深い。カイディン帝のフランスへの憧れが、ベッドや椅子の装飾、テキスタイルなどに現われている。

開館時間：6:00～18:00 無休
料金：12000ドン(144円)

● **ハノイ歴史博物館 (ハノイ)**
Bảo Tàng Lịch Sử

エルnst・エブラルド設計のこの極東フランス学院の建物は、植民地時代にルイ・フィノー博物館となり、さらに1958年にハノイ歴史博物館として開館された。石器時代から1945年の8月革命までのものが時代



ハノイ歴史博物館

順に陳列されているが、とりわけ注目したのは、紀元前1000年期のドンソン青銅器文化を代表する銅鼓(ドラム)だ。数多くの銅鼓が展示されているが、なかでもベトナム北部のハナムニン省のゴックルー村で発見された銅鼓は、考古学上もっとも古いタイプのもの。上面の幾何学模様が美しい。この銅鼓が、日本の弥生時代の遺跡から発掘された銅鐸と関連があるのではないかという説もある。

開館時間：8:30～11:45、13:00～15:45
月曜日休館
料金：4000ドン(48円)



二点共：館内の展示

● **ハノイ美術博物館 (ハノイ)**
Bảo Tàng Mỹ Thuật

フランス植民地時代には教会の寄宿舎として使われていたが、1971年に美術館としてオープンした。ここでの見どころは、まず



上：ハノイ美術博物館
下：館内の展示

3階の少数民族の衣装や生活道具。ベトナムには50以上の少数民族が住んでいるが、それぞれ民族ごとに異なる色あざやかな刺繍の衣装、帽子、バッグが多く展示されている。そして2階のディン(亭)と呼ばれる社の彫刻装飾。16世紀に各村落ごとに発達した民衆的な木彫文化がここに集約されている。ミュージアムショップでは民衆芸術であるユーモラスなドンホー版画や、アンティークの陶器などが販売されている。

開館時間：8:00～12:00、13:00～16:00
月曜日休館
料金：1000ドン(12円)



手すきの紙に木版刷りのドンホー版画

● **ホーチミン博物館 (ハノイ)**
Bảo Tàng Hồ Chí Minh

ホーチミン廟の近くにある博物館で、ホーチミン生誕100年の1990年にオープンした。ホーチミン廟で偉大な革命の父・ホーチミンの遺体に対面したあと、この博物館を訪ねるのがベトナムの人たちの見学コースとなっているようだ。ベトナムの他の美術館があまりにもシンプルな会場構成・陳列であるのに対して、ここはあっと驚くほどの斬新さ。それもそのはず、旧ソ連のレーニン博物館の専門家が会場設計・ディスプレイを手がけている。ロシア・アヴァンギャルドのコーナーにはタトリンの有名な建築模型「第3インターナショナル記念塔」がそ



ホーチミン博物館

びえ、スペイン人民戦線のブースにはピカソの「ゲルニカ」の巨大パネル、廃墟のようなコーナーにはコココーラの看板、といった具合に、この博物館自体が社会主義の大プロパガンダになっている。故ホーチミンの自筆の原稿、写真なども展示されているが、赤いハンカチを首に巻いた子供たちはビデオに夢中だ。

開館時間：火～木・土曜日8:00～11:00
13:30～16:00
日曜日7:30～11:00 13:30～16:00
月・金曜日休館
料金：入場無料

■ フランス領インドシナ連邦

ベトナムがフランスに植民地化された1800年代半ばから後半にかけては、列強諸国がアジア進出にしのぎを削っていた時代である。アヘン戦争で香港がイギリスに割譲され、ペリーが来航して日本に開国を迫ったのもこの時期だ。フランスは1858年にまずコーチシナ地方(南部のメコンデルタ地域)を獲得。さらにハノイを占領して阮朝を降伏させ、1887年にベトナム全土とカンボジアを併合してフランス領インドシナ連邦を成立させた。第2次大戦中は日本軍が進駐したが、戦後再びフランスが侵略して第1次インドシナ戦争へと突入。1954年のジュネーブでの停戦会議まで、フランスのベトナム支配は約100年にわたって続いた。その後、アメリカとの第2次インドシナ戦争(ベトナム戦争)が始まったことはよく知られているとおりでである。

■ ハノイ大聖堂

ハノイ占領後、フランス化政策のために、それまであった仏塔を壊して建てられた教会。完成は1888年。フランス・ゴシック様式で、黒と白の石を交互に積み重ねている。



ハノイ大聖堂

完成当時、フランスのある作家は「ボール紙のような装飾で醜悪そのもの」と酷評したという。ハノイの中心部、ホアンキエム湖の近くに建っているが、湿気が多いせいか表面はカビで黒ずんでいる。

■ 極東フランス学院

ポール・ドゥーマーによって1899年に開設された研究所。ローマやアテネ、カイロに開設されていた、古代文明の研究所として有名なフランス学院をモデルにしてつくられたものである。ここでは建築スタッフによる考古学部門が組織され、15世紀のチャム文化に代表される石の建造物、12世紀のアンコールワットにみられるクメール文化についての、まとまった調査・研究がなされた。成果は1931年にパリで開催された植民地博覧会で発表され、エキゾチックな東洋の遺跡は植民地への観光ブームをまきおこした。

■ フエ紫禁城

阮朝の王宮で、北京の紫禁城を真似てつくられた。堀と城壁に囲まれた広大な敷地内に、太和殿を中心とした廟や殿堂が配置されていたが、1968年の空爆によって、そのほとんどが破壊された。激戦の弾痕がまだに残り、瓦礫の跡地には雑草が生い茂っ



午門

て、まさに廃墟そのものの姿をみせている。現在残っている建物は、午門や太和殿などごくわずかで、一部は修復作業が進められている。



上: 太和殿の奥は廃墟
下: 廃墟のなかに畑が
つくられている

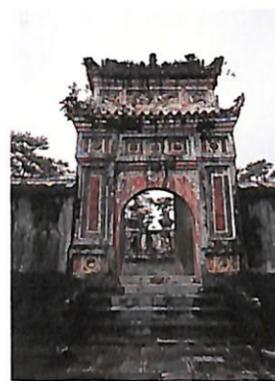
■ トウドック帝陵

フエには阮朝歴代の皇帝廟が多く残っていて、生前から自分の墓を建設することに情熱を傾けてきた皇帝たちの、それぞれの個性が陵墓に現われている。皇帝の功績を記した石碑、位牌のある祭壇、墓、この三つが広い敷地内に順に配置されているのが皇



蓮池に架かるあずまや

帝廟の伝統的なスタイルだが、トウドック帝の廟は離宮のような趣で、大きな蓮池に釣殿とあずまやが張り出している。皇帝はここで涼をとり詩を詠んだという。



トウドック帝廟

■ ホール・ドゥーマー

1899~1902年のフランス領インドシナの総督。混乱と不統一が続いた植民地の都市建設が、ドゥーマーによってようやく整備されはじめた。彼がもっとも力を注いだのは、交通機関の近代化である。フランス政府支援のもとで、多くの道路や橋、鉄道がつくられていくが、なかでもサイゴンとハノイを結ぶ縦断鉄道と駅舎の建設、ハノイの紅河にかかる2km近い長さの橋の建設が大規模な事業であった。しかし、こうしたダイナミックなインフラストラクチャーの整備は植民地経済を圧迫し、フランス社会にも大きな疑問を投げかけることになった。

■ エルンスト・エブラルド

フランス都市計画研究所のメンバー。エブラルドがインドシナ都市計画のディレクターに任命されたのは、火災と地震で破壊されたアテネのアクロポリス周辺を、バルテノン神殿の眺望を妨げないように整備した実績を買われてのことであった。彼は、フ

ランス本国のスタイルをそのまま踏襲するのではなく、あくまでもベトナムの視点にたって都市計画を進めることを一貫して主張。気候・風土に適した素材、通気性、遮光、方位などを考慮して、財務省庁舎、パストール研究所、極東フランス学院などを設計。またプランテーションの精米所やさとうきび精製所、紡績工場、セメント工場、水力プラントなどの施設建設、水路の充実に力を注いだ。

■ 陶片のモザイク装飾

フエに残っている皇帝廟の建物や寺院などの屋根飾り、柱には、ベトナム独特の陶片モザイクの装飾が施されている。陶磁器を割った破片を、貼り絵のように組み合わせ、龍、鳳凰、亀、魚、花などをかたちづくる手法だ。さまざまな破片の色彩・模様



三点共: 陶磁器の破片を
はめこんだ装飾

か楽しい雰囲気をかもしだしている。修復されたものは真新しい陶磁器が使われていて、なかには漢字が書かれた破片や西洋食器と思われるものもまぎれこんでいる。

■ ショップハウス

1階が店舗で、2階以上が住宅になっている建物。2~3階建てで、アーケードをもつものが多い。ベトナムだけに限らず、東南アジア一帯にこのショップハウスは広く分布しているが、詳しい起源はわかっていない。



ショップハウス

イギリスが植民地シンガポールで、商業地域にショップハウスを建てるよう規制したことから、周辺の都市がこれにならったという説。中国人街にショップハウスが多いことから、東南アジア各地に移り住んだ華僑が広めたという説もある。

■ ホイアンの日本人町

ベトナムの中部、ダナン市から30kmのところにあるホイアンには、かつて日本人町があった。山田長政がタイのアユタヤに日本人町をつくったことはよく知られているが、ここにも南蛮貿易の拠点として17世紀に日本人町が形成されていた。「来遠橋」をはさんで日本人町と中国人町が向かいあったが、いまでは日本人町に中国人が移り住み、日本の商人がつくったとされる屋根つきの橋も架けかえられている。